

第6回みなまた地域創生ビジョン研究会

平成28年9月25日（月）

【岩橋室長】 それでは、ただいまから「みなまた地域創生ビジョン研究会」第6回を開会させていただきます。委員の皆様方には、大変お忙しい中、お集まりいただきまして、まことにありがとうございます。

まず、本日の研究会の出席状況ですが、全委員数8名のうち全委員8名が出席されております。

次に、資料の確認と取り扱いについて、ご説明いたします。

お手元に、議事次第、1枚めくっていただきまして資料の1「委員名簿」、めくっていただきまして、資料の2「めざす地域社会像等について」、資料の3「第5回の意見の概要」、これが16ページほどございます、めくっていただきまして、資料の4「用語の定義」、続いて資料の5「マッチングポイントでの交流の目標（案）」、資料の6「目標達成のための課題及び対応策（案）」、資料7「研究会報告書骨子（案）」、最後に参考資料の1「交流の場（マッチングポイント）の参考イメージ」をお配りしております。資料と参考資料には、右上に四角の枠囲みでそれぞれ表示をしておりますので、そこを見ていただくと開きやすいと思います。また、資料ごとに左上をホチキスでとめて、ページ番号は資料ごとにつけております。一つ一つ資料をご確認いただき、もし不足している場合にはお申しつけください。

それと、お手元に前回資料という紙を2枚お配りしております。皆さん、ございますでしょうか。

本日の資料やご意見等につきましては、原則全て公開とし、後日、発言者名を示した議事録を各委員にご確認いただいた上で公開させていただきます。

それでは、この後の議事進行につきましては、永松座長にお願いいたします。

【永松座長】 皆さん、こんにちは。

それでは、早速、会議に入らせていただきたいと思います。

今日は、まず資料2で、これまでの経緯と、本日議論いただくことは何かということを確認いただきます。その上で、前回までに議論していただきました、目指す地域社会像のコンセプト、ビジョンについて、前回の意見のポイントを事務局のほうから説明していた

だいて、修正案がありますので、それを再確認していただきたいと思います。次に、用語の定義についてですが、これも前回いただいた意見のポイントを事務局から説明していただいて、修正版について再確認いただきたいと思います。そのほかの事項も若干ありますので、それもあわせて前回いただいた意見の要点を振り返りたいと思っております。それから、本日の議事の（４）マッチングポイントでの交流の目標、それから、議事の（５）目標達成のための課題及び対応策について事務局から説明していただいて、皆様のご意見をいただきたいと思っております。それから、議事の（６）、これが最後になりますが、研究会報告書の骨子案ですね、目次立ての部分についてもご意見を伺いたいと思っております。

それでは、早速、資料２から、事務局に説明をお願いしたいと思います。

【岩橋室長】 それでは、資料２をお開きください。

上段の大きな矢印の絵で説明をいたします。これまでこの研究会で議論してきた経緯を簡単にまとめたものです。現状というところから、右上の大きな星のほうに向かって研究会での検討を重ねてまいりました。

まず、この研究会で議論するテーマを「広い意味の健康」の分野にすることを、第２回の研究会で決めていただきました。１月ですね。次に、その健康の分野で目指す方向性を、「３世代を育む健康なまち」にすることを、第３回の研究会で決めていただきました。これが５月になります。その後、「３世代を育む健康なまち」のコンセプトとネーミングにつきまして、第４回の研究会で議論していただきました。これが７月になります。そして、前回、第５回で、大きな星のところにあります、１０年先に目指す地域社会像のコンセプトとビジョン、それと用語の定義について、多くのご意見をいただいたところです。

そこで本日は、まず大きな矢印のところにありますコンセプトとビジョンその修正版を用意しておりますので、再確認をしていただきまして、その次に用語の定義を再確認していただこうと思っております。その上で、大きな星から左のほうに行きまして、水色で示しておりますところの交流の目標の設定と、目標達成のための課題及び対応策を決めていただこうと考えております。

ここまで来ますと、一応、ビジョンがあつて、コンセプトがあつて、方針、手段があつて、目標があつて、その目標を達成するための課題、対応策ということで、一通り流れたことになりますので、ここまで来ましたら、最後に、研究会報告書の骨子案に入っていきたいと考えております。

以上です。

【永松座長】 ありがとうございます。

じゃあ、引き続き、資料3の説明をお願いします。

【岩橋室長】 それでは、資料3をごらんください。

前回、事務局案のコンセプトとビジョンについていただきましたご意見を、5つの点にまとめております。前回の事務局案は、先ほどお手元に用意しておりました、この2枚のペーパーになります。これをあわせて見ていただくとわかりやすいかと思っております。

まず、1点目でございますが、コンセプトとビジョンの両方に「健康」の文字がありまして、その括弧書きで、「(身体的・精神的・社会的な健康)」という言葉を入れているので、この括弧書きについていただいたご意見です。コンセプトとビジョンの両方には要らないとのこと、一番下に結論を示しておりますが、その結論のとおり、コンセプトのほうの括弧書きは残して、ビジョンのほうは削除することにしております。

続いて、めくっていただきまして、資料3の2ページに行きまして、ビジョンの中に「それぞれの世代の課題」という言葉がありました。その括弧書きで「たとえば低出生体重児、子どもの肥満、生活習慣病等」という言葉を入れているので、この括弧書きについていただいたご意見です。特に、あるべき姿を示したのがビジョンなので、そこに具体的な「例えば」といった語は要らないのではないかなどのご意見をいただきました。そこで、一番下の結論のとおり、その括弧書きは削除することにしております。

続いて、3ページに行きまして、ビジョンの中の「解消を図るとともに」という表現についていただいたご意見です。ビジョンなので取り組む姿が見られたほうが良いというご意見を踏まえて、一番下の結論のとおり、「解消に取り組むとともに」としてしております。

続いて、4ページに行きまして、ビジョンの中に「水俣環境アカデミア」と「水俣病資料館」という具体的な施設を入れているので、これらについていただいたご意見です。これらの施設では健康問題を扱っていませんので、特に例示する必要があるのだろうかというご意見をいただきました。そこで、一番下の結論のとおり、この二つは削除することにしております。

続いて、5ページ行きまして、ビジョンの中の「水俣市」という書き出しと、「市」という書き出しについていただいたご意見です。ビジョンの前に議論していただきましたコンセプトをつくる時に、「水俣市は」という表現を入れた経緯がありますので、ビジョンのほうの「水俣市では」と、下から3行目の「市では」という二つの表現は削除することに

しております。

コンセプトとビジョンについては以上になります。

【永松座長】 ありがとうございます。

私も少し忘れたところがあったんですが、前回の会議のときに指摘されたもので、いずれもそこで、こういう書き方にしたらどうかと一応結論のところに書いてあるんですが、そういう形で事務局のほうから報告がなされました。これに関してはいかがでしょうか。特に問題がなければ、こういう修正を図るということにして進めたいと思いますけれども、よろしいでしょうか。

(「異議なし」の声あり)

【永松座長】 ありがとうございます。

それでは、今資料の3の5ページまで行きましたので、引き続いて、6ページの用語の定義の説明をお願いします。

【岩橋室長】 それでは、資料3の6ページをごらんください。

前回、事務局案の用語の定義についていただきましたご意見を三つの点にまとめております。前回お出しいたしました「用語の定義」を、先ほどの資料の2枚目につけておりますので、これを一緒に見比べていただくとわかりやすいかと思います。

まず最初に「3世代」を定義しておりまして、(2)の明朝体で書いてあります「例えば、胎児は体内に……」という2行と、その下に枠囲みで、「子ども」と「親世代」と「高齢者」と書いておりますが、そのうち、特に「高齢者」についていただいたご意見を、先ほどの6ページにまとめております。特に、ご意見の中で、用語の定義の中に「例えば」という話は要らないということで、7ページの一番下の結論に書いておりますとおり、「例えば」という2行は削除をしております。また、もう一つの、「子ども」「親世代」「高齢者」を、前回資料では囲みの中で年齢で三つに区分をしていましたが、定義の中でそこまで明確にしておく必要はないのではないかとということで、7ページの一番下の結論のとおり、点線囲みの中の「子ども」「親世代」「高齢者」の説明は削除しております。

続いて、めくっていただきまして、8ページに参ります。ここでは、「健康」についていただいたご意見です。特に、「社会的健康」の定義についてはざっくりと書けばよいのではないかとということで、8ページの一番下の結論のとおり、でき次第ということで、石原委員から事務局へ情報提供を行っていただくことになっております。

続いて、9ページに行きまして、「いきいきと充実（高齢者）」についていただいたご意

見です。ここでは、ものすごく難しい言葉以外はあまり定義をしないで市民の方に考えてもらおうということで、9ページが一番下の結論のとおり、「すこやかに成長（子ども）」と「すこやかに成長（親世代）」、それと「いきいきと充実（高齢者）」の用語の定義を削除しております。

用語の定義については以上になります。

【永松座長】 ありがとうございます。

最初のほうの「3世代」のところでそれぞれ定義されていたんですが、定義をし出すと、いろいろ細かくなったり、特に高齢者の定義というのは非常に難しいので、読む人がある程度自由に想像する形にするといいますか、ここであまり深く決めなくてもいいのではないかということでした。そのほかの用語の定義についても前回の意見を踏まえて修正されていますが、これでいかがでしょうか。よろしいですか。

（「異議なし」の声あり）

【永松座長】 ありがとうございます。

じゃあ、用語の定義についての修正は、このような形で事務局にお願いするとことにしたいと思います。

それから、続きまして、ちょっと戻っていただいて資料の3の10ページのサブネーミングについてのところから事務局に説明をお願いします。

【岩橋室長】 それでは、続きまして、資料3の10ページをごらんください。

サブネーミングについて植木委員からいただいた案です。コンセプトやビジョンの議論の中で、サブネーミングについてのお話を以前しております。ただ、サブネーミングにつきましては、全体が見えてきた段階でフィードバックすることになりますので、今の時点では、一番下の結論に書いておりますとおり、「検討継続」という扱いにしております。また議論する時期が来たときをお願いしたいと思います。

続きまして11ページに行きまして、人材育成やポイント制についていただいたご意見です。主にマッチングポイントを実際に動かす人ですとか、実際に人が動くための仕掛けについていただいたご意見です。後ほど、今日の最後のほうで研究会報告書の骨子案をご説明いたしますが、その中にも出てまいります。

続いて13ページに行きまして、ここからは具体的な施策例について各委員からご紹介していただいたものです。水俣で実施する場合、どんな形がいいかというご意見を頂戴いたしておりますが、一つ一つはそれぞれの場所での個別の事例になりますので、参考として

ごらんいただくにとどめまして、このまま先に進んでいきたいと思います。

一応、前回の振り返りについては以上になります。

【永松座長】 ありがとうございます。

サブネーミングについては、ある程度全体像が見えてから改めて検討するという形にさせていただきたいと思っております。それから、その後の資料については、これから議論の中で出てきますので、必要に応じてご意見いただきたいと思っております。

それでは、引き続き、資料5の説明をお願いします。

【岩橋室長】 それでは、資料5をお開きください。あわせまして、資料2が今日の資料の上から3枚目でございますので、先ほどの大きな星を今一度見ていただきたいと思えます。今からご説明します資料5は、この大きな星の左側にあります、「交流の目標を設定する」と青い枠囲みで書いているところになります。今からここの説明を資料5でしてまいります。

まず、資料5では、交流のためのマッチングポイントを設けるわけですが、事務局案では、そこでの目標を、「子ども」「親世代」「高齢者」というふうに三つに分けて書いております。一応、一通り読み上げますと、「子ども」が、他世代と多くの関わりの中で、愛情や信頼感、優しさや思いやりを強く持つようになり、地域での思い出や実体験を重ねて成長できるようにすること。次に「親世代」が、子どもとの遊びなどを通じて健康増進に努め、健康診断や保健指導を受診するなど、常に健康を意識するようにすること。三つ目の「高齢者」が、自らの健康に配慮しつつ、知識や技能、趣味などを生かして、好きな所を見つけて、生きがいを感じながら生活できるようにすること。

非常にシンプルではありますが、マッチングポイントでの交流の目標案については以上になります。

【永松座長】 ありがとうございます。

これは、このくらい簡潔に書くという理解でよろしいですね。

【岩橋室長】 はい。

【永松座長】 じゃあ、済みません、ここに「子ども」「親世代」「高齢者」と三つありますが、いわゆる目標とされる案の文言と表現ぶり等について、皆様のご意見を伺いたいと思います。

じゃあ、まず私のほうから。「子ども」の2行目なんですけど、思い出というのは体験の後に出てくるのかなど。それと、実体験と書いてあるんですけど、実じゃない体験というの

があるのかなという疑問があります。さまざまな体験を重ねてとかいう形で、体験すれば思い出になると思うので、「思い出」を残すにしても、順番は逆にしたほうがいいかなと思いますけど、いかがでしょうか。

何でも結構ですので、思いついたことを言っていただければと思います。

石原委員、何かないでしょうか。

【石原委員】 ありがとうございます。マッチングポイントでの交流の目標をつくることはとても重要だと思っています。今、案ということで、このぐらい簡潔にという例を示したということだったんですけども、どういう言葉を使っていくのかというところ、例えば「3世代育み健やかタウン」という、「3世代」「育み」「健やか」ということと、その後のビジョンの中に出てくる言葉がここで使われるのは違和感はないんですが、「愛情」とか「信頼感」とか「やさしさ」とか、それぞれはいい言葉だと思うんですけども、これがどこから出てきたんでしょうか。これをたたき台にしてつくっていくのか、それとも、また改めてつくったらいいのだろうかというところを、まず基本的なつくり方の方針としてお教えいただければと思います。また、このたたき台で、「愛情」「信頼感」「やさしさ」といったようなことと、あと2番目の「健康診断」「保健指導」というのは大分次元が違うので、そこをどういうふうに整えていくのだろうかというところも含めて、事務局からご意見いただければと思います。

【永松座長】 「健康」というメインが最初にあったので、ここではちょっと、それよりもっと広い形での目標——精神的な健康はもちろんありますし、社会的な健康もあるので、石原委員が言われたように、健康増進が「親」と「高齢者」にはありますけど、「子ども」にないというのがちょっと……。いかがでしょうか。

【岩橋室長】 もともとは、このビジョンを、この姿を達成するために、どういう目標があったらいいだろうかという視点で、今一応、「子ども」「親世代」「高齢者」の三つに分解して、それぞれに書いたところです。確かに、「健康診断」「保健指導」は「子ども」のほうにも要素を入れたほうがいいのかなと今感じたところです。

【石原委員】 ありがとうございます。「子ども」に健康診断を入れるかどうかということよりも、つくる上での根拠、つくる考え方をどうしていくのかということのを伺いたかったのです。例えば、ビジョンをこのように決めるに当たってはかなり慎重に検討したと思うんですけども、では、それに対する、実現化する場所としてのマッチングポイントでは何が目標とされるのだろうかという。ビジョンから落とし込んでいくのだということな

のか、それとも何か指標などで数値的な分析をして、例えば、親世代は健康診断、健康行動に問題がありますと、だからこれを入れましょうと、子どもは、実は親が言われなくても健康診断にはどんどん連れていくので、それは問題ないから健康診断は目標に入れなくてもいいという根拠とか、つくっていく考え方の道筋を示していただけると、とてもいいのかなという気がしたということです。

【岩橋室長】 根拠、道筋は、資料2のほうで、ビジョンからだんだんと具体化を図っていくというふうにしておりますので、あくまでもビジョンの姿をどうやったら達成できるだろうか、そのためにどういう目標を設定したらいいだろうかということで、ビジョンの姿がまずは基本になるかと思います。

【石原委員】 済みません、これでおしまいにしますが、ということであれば、これがビジョンですという中で、例えば、市民の代表に、このビジョンが図られるためには、マッチングポイントではどんなことがあったらいいでしょうねみたいなことを、ワークショップをして決めましたとか、合理性というか、そこがあったほうがいいかなという意味で申し上げたんですが、ワークショップに限った話ではないんですけれども。ビジョンから導き出したのはよくわかります。そこからここにどう持ってくるかということですね。

【永松座長】 ほかの委員の皆さんはどうですか。

【望月所長】 「子ども」と「親世代」の記載は少し離れた感があります。おっしゃるとおりかと思います。ベースがビジョンであるならば、もうちょっと健康というところを子ども世代の部分でも出していくのかなという印象を受けたところです。子どもの関係でも、生活習慣病の予備軍とかいっぱいありますし、逆に親を引き連れて健康増進を図るかというメリットもありますので、何かそういうところで健康面というのを少し入れた形で考えてみます。

【永松座長】 ほかにご意見ございませんか。質問でも構いません。

【松永委員】 一つ質問と一つコメントです。まず質問ですが、ここで言う目標というのは、それぞれの世代、例えば子ども世代が10年後にどうなっているかという意味で捉えていいんですか。

【永松座長】 こうすることによって実現される姿。確かに10歳の子どもは10年すると20歳になりますので。

【松永委員】 すみません、10年後にというのは、今10歳の子どもが20歳になったということではなくて、10年後の理想の社会、地域社会ができたときに、子どもがどうあるべ

きかだったり、子どもの理想の姿をここでは目標と言っているんですか。そういう設定でいいんでしょうか。

【永松座長】 そうですね。

【岩橋室長】 そうですね。

【松永委員】 コメントの方は、やっぱりさっきの「健康診断」「保健指導」のところだけやけに具体的なことがちょっと気になります。それと別に、これは多分表現の問題だと思うんですが、子どものところには、「多世代と多くの関わりの中で」というのがあり、親世代のところでは、「子どもとの遊びなどを通じて」というのがあります。交流の話を具体的に書かれているんですね。しかし、高齢者のところにはその話がなくて、マッチングポイントで交流しますとなっています。目標にまた交流を入れる必要があるのかというのが疑問です。もし入れる必要があるとしたら三つとも入れたほうがいいのではないかと思います。バランスの問題ですね。

「育む」というのがキーワードになっていたと思います。育むとは何を育むのか？ 多世代交流の中で何を育むのか？ 当然子どもも育むし、親世代も高齢者も育むんですよね。交流する中でお互い育てていくというイメージだと思うんですよ。自分たちの世代も育む、育まれるし、ほかの世代も同じく育み、育み合う。その育むというのと、健康というのと、世代間交流というのを、どこまでここに表現するかということだと思います。世代間交流は前提だから目標には入れないという手もあると思いますし、親世代のところとか高齢者のところは、若干育むみたいなニュアンスが弱いかなと思います。

【永松座長】 そのほかに。とりあえず皆さんから意見を伺いたいと思いますので。

藤本委員。

【藤本委員】 お二人の委員のお話を聞いていて、少し気がついたんですが、「マッチングポイントでの交流の目標」というタイトル自体が分かりづらい気がします。おそらくは議論の中で言う、大きな各3世代の目指すところ、あるべき姿の目標なのかなと予想しましたが、「マッチングポイントでの交流の目標」というと、石原委員がおっしゃられた、もっとその場所ごとに世代の人たちのところに落とし込んで設定してもらった具体的な目標をというか、数値化されたものだったり、そのようにも聞こえます。大きなくくりの目標なのか、もっとマッチングポイントの交流の場で、現場に来た各世代の人たちが具体的にどういう目標を持って、この大きな目標に向かっていくのかという足元の目標なのかというのが、少しわかりづらいと思いました。多分、こちらの資料2のほうに見られている「目

標を設定する」の目標がイコールだという理解なんですよ。そうすると、マッチングポイントでのというふうに限定をしてしまわないほうがいいのではないかなと思いました。マッチングポイント云々ではなくもっと大きなくくりでの目標という意味合いなのではと思いましたので。

【岩橋室長】 確かに10年先の目標として案はつくっていますね、一つ一つの場所での目標というよりも。

【永松座長】 どちらにするかですよ。

【望月所長】 大きなくくりでつくってきたというのはあります。具体的にこの数値をこうするとかは各マッチングポイントで考えていく話ということです。交流というのはこういう目的でという、ビジョンを踏まえた大きな意味でというのが、今日準備したものです。

【永松座長】 ほかにございませんか。

【勢一委員】 しばらくお休みしていたので関係性がわからないところもありますが、今回の交流の目標というのが誰にとっての目標なのかがわかりにくく感じています。行政の側からすると、このような形式で目標が設定されると、それをいつまでに、どういう方法でやるのかという議論、おそらく市のほうではそういう形をとることになると思います。そうしますと、当然PDCAサイクルのような仕組みの中で、この目標を具体化し、それを実施した結果、成果はどうだったのか、効果が足りない部分についてはもう1回修正をしてという形で回していくという仕組みに乗ると思いますが、そうした場合のことを考えると、今回の目標という設定が、そのような使われ方を想定したものと同じでいいのか。フォローアップや成果の達成のチェックというのは、多分これからはなかなかやりにくいのかなというのがあって……。

【永松座長】 目標のほかに何か適当な言葉がありますか。

【勢一委員】 私は資料2の星がついている図を見て感じたのですが、ビジョンがあって、方針、手段を定めるということで、マッチングポイントを設けるということまでは具体化されていて、その次のステップで目標設定になります。感覚的にはビジョンがスローガンのようなもので、それをもう少し具体的な内容として落とし込むとどうなるかというところでおそらく目標設定があって、その目標をどういう手段で実現していくかという形になるのが、流れとしては自然かと思います。そうすると、この順番というか、くくりの並びがやや不自然なのかなという感じがします。さらに、それで目標達成のための課

題や対応策の検討となるので、多分そのバランスが少しずれているのかなという印象を私自身は持っています。ただ、どのくらい抽象的なものがあるのか、具体的なものがあるのかは設定の局面で変わってくるので、ここは経緯を含めて、事務局の考え方を教えていただきたいと思ったところです。

【永松座長】 難しいところですね。

植木委員は何かございませんか。

【植木委員】 なかなか難しいですね。

【永松座長】 確かに、一般的に目標と言われると、抽象的なところからおりて具体的な話になっていて、じゃあ目標を達成したかどうかはどういう指標ではかりますかみたいな話に普通はなるので、これでいくと、どちらかという、資料2で言うと、黄色の中の方針を3世代に分けて書いたものに近いのかなという感じはします。

【植木委員】 この施策の実行には、まずコンセプトがあって次にビジョンがあって、そのビジョンを具体的にビヘイビアで落とし込むときに、マッチングポイントという仮説の設定が一番大きいわけですよ。それをエンゲージメントしていくというか、今、子ども、親世代、高齢者でそれぞれ文脈（最優先課題）が違うじゃないですか。健康なら健康を、健やかに生きるのなら生きることを、そのテーマに基づいてもう少し市民がわかるようにして、要するに市民目線でつくったほうがいいのかないかなという気がします。マッチングポイントが、いわば一番の舞台じゃないですか。私の言葉で言うと、シチズンシップの形成を上げるためとか、ソーシャルキャピタル（絆の強化）をより深くするためのもので、このマッチングポイントの設定はすごくいいし、そのことでの交流についてはいいと思う。ただ、それが目標なのか？ 目標という言葉はちょっと忘れて考えてもいいのかなという。ちょっと、今言葉が浮かびませんが、重要なところだと思いますけど。市民にとっては、このマッチングポイントを出たものを規範として行動がなされていくことになると思いますが。

【永松座長】 目標というのがちょっと難しく。資料2を見ていたら、真ん中に「交流の場マッチングポイント」って太字で書いてあるんですけど、その下に「全世代対象」とか「自主的な活動」とか、これ自体が目標になっているような感じがするんです。ここでは、これらは手段に位置づけてあるんですよ。理想的なマッチングポイントでの活動が行われると、こういうふうになりますというのが、多分、ここに目標と書いてあるところだと思うんですけど。

【藤本委員】 学校の授業を例えとして近い言葉を考えると、「授業の狙い」みたいなものなのかなと思いました。

【永松座長】 そちらのほうが近いですね。

【石原委員】 機能という言葉が浮かんだんですけども。ビジョンがあって、ビジョンに対する目標なわけですけど、それを実現化するための機能、ファンクションですね。市民の言葉で言えば、例えば、出会う、交わる、理解するとか。

【永松座長】 マッチングポイントに求められる機能ということですね。

【石原委員】 そうですね。期待される機能。

【永松座長】 目標より、先ほど言われた「狙い」とか「機能」という言葉のほうが、内容的にはしっかり来ますよね。それじゃあ、ちょっとまた事務局のほうで言葉を検討してもらえますか。

それと、各委員からご指摘がありましたように、「多世代との多くの関わりの中で」は全部にかかるので、これは一番上に上げてしまうか、外すか、あるいは全部入れるかということと、子どものほうには健康の話が入っていないというのと、親世代は健康だけが書いてあるという。高齢者が一番バランスがとれた書き方になっていて、一応、それぞれの内容に生活シーンが入るように、ちょっとバランスを考えて修文をしていただければと思います。

【岩橋室長】 はい。

【永松座長】 今日はちょっと難しいので、また事務局のほうで検討してもらって、次回、修正案を見ていただいて決めることにしたいと思いますけど、それでよろしゅうございますか。

(「異議なし」の声あり)

【永松座長】 じゃあ、次に移りたいと思います。次は資料6ですかね。資料6について事務局のほうから説明をお願いします。

【岩橋室長】 それでは、資料6をごらんください。本日の議題の(4)目標達成のための課題及び対応策の案です。点線囲みで凡例を示しておりますように、上に目標達成のための検討事項というか下の矢印から右側に対応策の案を示しております。まず、①の実施にあたり必要なことといたしまして、スタートアップ支援、リーダー、担い手の育成というふうに、これまで出てきたものを挙げております。

一つ目のスタートアップ支援は、矢印の右側を読みますと、利用者や事業者にわかりや

すい成功ポイントを三つ程度つくる、公と民とそれぞれあるのが望ましいというものです。

二つ目のリーダー、担い手の確保は、リーダー、担い手にやりがいを持たせる、動機づけの問題、それと、育成方針の検討が必要。例えば、マッチングサポーターの登録制、OB教員や高校生を対象に考えたらいいだろうと。OB教員の活用は、口コミで、特に同級生を巻き込むのがいいだろうというご意見をいただいております。次の矢印は、地域の誇りを、おじいさんが子どもに、その場所に連れていって説明し、最終的には市民教育に広げる日曜学校のようなものが考えられるというご意見をいただいております。

三つ目のポツは、みなまた地域の特色を活かしたマッチングポイントということで、一つの例といたしまして、白梅グループというものがございます。老人ホームと保育園と両方持っておられますので、特色を生かしたマッチングポイントになるだろうと。二つ目は深水医院で、お隣に幼稚園をお持ちですので、定期健診に来た高齢者とそういった場がつくれるのではないだろうかというご意見です。

次の四つ目のポツは、いかにマッチングポイントを続けるかということで、高校や中学校の授業やプロジェクトの一環として行うのがいいだろうというご意見をいただきました。

その次のポツは、みなまた地域の特色を活かすということで、地域の自然財産を生かした遊びの発見、遊びを通じて誇りを開発する、やったことのある世代から情報をもらうといったご意見をいただいております。

一番下のポツは交流メニューの準備ということで、モデルとなるプログラムを作成したり、マッチングポイントの使い方を中学生や高校生に考えてもらおうというご意見をいただいております。

めくっていただきまして、2ページに行きまして、参加者がその気になるための方策が必要だということで、ここで、ポイント制や、中高生に企画段階から入ってもらうというご意見をいただいております。

次は、子どもが参加したくなるものにするということで、楽しいものだったり、おもしろいものだったりということが必要だというご意見をいただいております。

次は、高校生、大学生の活躍の場をつくるということで、地域内外の若者、子どもと、水俣の大人、高齢者で発案するのがいいだろうと。二つ目の矢印は、どう使いたい、どう使ったら効果的と思うかという企画の検討から、高校生、大学生にかかわってもらうのがいいだろうというご意見をいただいております。

それから、経費が必要だということで、牧迫委員からご紹介いただきました、健康自生

地のように、少額であってもやっぱり予算は必要だというご意見をいただいております。

続いて、②は、マッチングポイントがそれぞれ立ち上がった後に、それぞれのポイントの間に相乗効果を考えていくことが必要というご意見です。

三つ目は、市や公的機関に期待することということで、全て市で行うというわけにもいかないと思いますので、市とその回りにある公的機関というふうに分けて考えてみたらどうだろうかというご意見です。

以上になります。

【永松座長】 わかりました。ありがとうございました。

では、これに関して簡潔に書いてあるところもございますので、これに書き加える、もしくは修正を加えたほうが良いという部分があれば、発言をお願いしたいと思います。

一つ質問なんですけど、①の一番上のポツのスタートアップ支援で成功ポイントっていうのはどういうものなのか、ちょっと。

【岩橋室長】 市民の方が見て、あそこのマッチングポイントっていいよね、うまくいっている、成功しているよねといったことがわかる場所を3カ所ぐらい挙げてもらう、これを成功ポイントというふうに表現しています。

【植木委員】 モデルのような。

【岩橋室長】 そうですね。モデルになるような場所とってください。

【永松座長】 モデルポイントということですか。

【岩橋室長】 はい。

【松永委員】 質問なんですけど、2ページ一番目に参加者がその気になるための方策というのがあり、その下に子どもが参加したくなるものにするというのがあるんですが、上の参加者というのは、子どもや大人、高齢者を含んでいるんですか。

【岩橋室長】 はい。

【望月所長】 その参加者は全ての世代という意味です。

【松永委員】 そうすると、その下にわざわざ「子どもが」とあるのは、子どもだけ特別何かが必要だということですか。

【岩橋室長】 それは、子どもが起動力というか、加わってくれることで、大人もその気になってくれるという、エンジンみたいな役割を期待できるということで、「子どもが」というふうにしています。

【松永委員】 わかりました。

【望月所長】 前回、前々回ぐらいの議事録をもとにしています。

【永松座長】 一番上の「参加者が」というのは全般的に言える話で、特出しして、特に子どもについては、高校生、大学生についてはという意味ですね。

【岩橋室長】 はい。

【永松座長】 それと、その続きなんですけど、参加者がその気になるための方策のところ、中高生に企画段階から入ってもらおうというのと、高校生、大学生の活躍の場をつくるでは、地域内外の若者・子どもと、大人・高齢者で発案するというのは、若干ちょっとかぶっているような。

【岩橋室長】 かぶっている部分があると思います。ほとんど今まで皆さんからいただいたご意見から持ってきていますので、多少は似たようなご意見があると思います。

【永松座長】 このほかに、藤本委員、何かございますか。

【藤本委員】 今水俣で、いろんな若いグループ、例えば飲食店のグループなどで幾つかの動きがあるので、そういう既に動き始めている人たちにうまく入ってもらえるように……。水俣の過去を見てみると、一つ一つの動きが大きくなっていくことがあまりない気がして、ぼつぼつと単発な気がしています。それがうまく横連携ができるような仕組みを、ここに落とし込みたいというのがあります。せっかくそういった動き出しがあるところを、熊本気質なのかわかりませんが、肥後の引き倒しとも言いますが、どうしても競ってしまうというか、一緒にやろうよという雰囲気が生まれにくい気がしています。せっかく動いている、活動している若者たちがいますので、その人たちをうまく巻き込んで、企画段階から入ってもらおうとか、そういうのがいいのではないかなと思います。

【永松座長】 そうですね。ここでは、どちらかというと個人が書いてあるんですけども、実際にあるいろんな団体の活動そのものをマッチングしていくとか、横につなげていくとか、そういうことですね。確かにそういう視点は必要です。僕は熊本の西区のまちづくりに携わっているんですけど、そこで、多くはないんですが、ほかのうまくやっている自治会と校区なんかの人に意見を聞いて、まねするとか手伝いに行くということがありますので、そうすると大分やっぱり共有感というんですか、生まれてきて、それぞれができることを協力してやろうという気持ちが生まれるように見えて思います。確かに、実際にやっている人たちがばらばらにやっていて、ほかに関心を持たないことがあります。協力すると1足す1が3になることもあるので、そういう視点も踏まえて加えていただければと思います。

深水委員、何かございませんか。

【深水委員】 済みません、全くわかりません。

【望月所長】 前回、水俣の遊びで、上流のほうでタイヤに乗っていると、いろんな話がありました。健康づくりのためのマッチングポイント的な発想というのは、かなり全国的にもいろいろと言われていて、それはそれで大切ですけど、水俣ならではのものが、地域とか特別な風土とか気候とか、いろんなものがあると思うので、ぜひご紹介お願いします。

【深水委員】 今日、午前中に湯出小学校の運動会に行ってきたんですけども、湯出小学校は、何年か前まで中学校もあったんですけども、昔から小学校運動会じゃなくて、湯出小、湯出中、地域合同体育祭という形で開催されていたそうです。小学校、中学校、地域も九つぐらいに分かれるのかな、それぞれのテントを立てられて、昔はそれはそれにはぎやかだったそうです。これまで参加する機会がなくて、今日初めて参加したんですけども、今は小学校しかないので小学生全員と地域の人と一緒に楽しんでおられました。子どもたちだけの競技もあるんですけど、地域と子どもたちということで、テントの設営から何から全部地域の方がされるようです。打ち上げも以前は各地域であって、先生方は各地域を回って打ち上げに参加されていたそうです。昔はそれが当たり前だったのかもしれないけれども、今さらそういうことを全てのところで復活させるのは無理なのかなと思いつつ、こういうのは何とかずっと残ってほしいなとひしひしと今日は思いました。

【藤本委員】 深水委員の話を知って思い出したんですけど、私は第一小学校の出身で、私がいたときは1,600人ぐらいの子どもたちがいました。運動会ときにはお弁当が家族分だけではなくて、地域のいろんな人たちの分も含めて20人分ぐらいを母親が準備して持ってきて、町中の大人たちがみんな集まって、お祭りみたいな感じの運動会だったんです。親以外のおじさん、おばさんが応援してくれる中で走るとか、確かにそうだったんですね。

【永松座長】 今はほかの地域はどうですかね。熊本だと、人数が多いときは小学生だけ、中学生だけなんですけど、だんだん少なくなって、きっと子どもたちだけでは運動会が成立しづらくなって、町内会でやっていた運動会みたいなものを合同でやるという形です。確かにいろんな人が来るので、それはそれで非常に違う意味での和やかさが出るというか。特に子どもの数が少ないところは、親も入って一緒に運動会をやらないと盛り上がりがないところがあるんですよね。

そのほか、ございませんでしょうか。古賀所長、何かないでしょうか。

【古賀所長】 私はオブザーバーとして参加させていただいていますので、あまり強い意見というのはないわけですが、マッチングポイントの考え方をもう少し……。子どもにとっては遊びの場であるべきでしょうね。その中で経験と体験というのは意味が違うと思いますので、それを自分のものとして成長していく場だという捉え方をすべきかなと。親の世代では、やはり情報交換の場であり、石原委員がおっしゃった、機能、ファンクションとともに、そういう場であるべきだなと。そうやって考えると、高齢者にとっては生きがい発見の場という整理ができるのかなというふうに考えました。

以上です。

【永松座長】 そういうふうに整理するとわかりやすいですね。確かに、子どもにとっては無邪気に遊ぶ、遊び自体が学びになるということだと思います。ありがとうございます。

何でも構いませんので、そのほかにご意見ございませんか。

【石原委員】 幾つかあります。

まず1点目、藤本委員と望月所長がおっしゃったことと関係するかと思うんですが、委員が書かれたものでいうと、必要経費とスタートアップ支援というところに関する話だと思うんですけど、前にも申し上げたんですが、予算は要るときにはもちろん要るんですけど、しかし予算ありきでスタートアップ支援だけやって、はしごを外されちゃってということがよくあると思うんですよね。その中で、藤本委員がおっしゃったように、むしろ既にできている場を認定していくというか、そっちの方向のほうが新しく立ち上げるだけよりも多分いいだろうと一つ思っております。例えば、最近で言えば、商店街の中に若い人たちが、オーガニックまではいかないかもしれませんが、健康に優しいお弁当をつくるということで、まさに健康のための拠点づくりを、若い人たちと商店街、まさに子どもたちの親世代がやっていて、子どもたちもそこに集いながら、時々そこでまちのイベントをしたりしていますが、彼らの非常にすばらしいなと思うところは、行政からの予算を待っているだけだと続かないということで、自分たちで、お金が回るような仕組みをかなり意識してやっています。ですので、常にどうやって継続してお金が回っていくのかということ視野に入れたような方法でやろうとしている。それを考えずに、短期的な予算でのスタートアップ支援だけすると危険であると思います。

2点目ですが、そういう意味で言いますと、既存のものを生かすということで、既存の

ものを生かすときに、古賀所長がおっしゃいましたように、私が思いますのが、例えば、岩橋委員がワークショップをされた、嶽村さんでしたっけ、あそこは何という場所だったでしょうか。

【岩橋室長】 ふれあいセンターです。

【石原委員】 ありがとうございます。ふれあいセンターは一つのマッチングポイントであると思うんですけども、例えば、あそこに何が足りないのかと言ったことを調べて、例えばあそこに健康に関するパンフレットを置くとか、今あるもののプログラムもしくは質の改善という意味でてこ入れするほうが、もしかしたら新しくつくるよりもいいのかなとちょっと思いました。

それと3点目として、全部つながっているんですが、所長がおっしゃった水俣ならではの意味で言いますと、もちろんまちのお祭りとかもありますし、水俣病の方たちの語り部さんたちの活動とか、修学旅行で来ているようでたくさんありますけれども、まさに、健康、環境に関する発信だと思しますので、そういうものを改めて見直していくというのも、また重要と思います。今お母さんたちの健康増進の活動と水俣病の問題、まるで別個のものとして語られているんですよね。それをつなげていくという活動があってもいいのかなと思いました。

以上です。

【永松座長】 ありがとうございます。それから、今配られました、これですけども、水俣の名産品、特産品……。

【望月所長】 水俣スイーツで、水俣は非常にスイーツを売りにしてしまして、デコポンを使った洋菓子です。

【永松座長】 所長のおごりだそうです。

【望月所長】 ウォーターブリッジという名前で、不知火という銘柄のデコポンをジャムにしてつくったと書いてあります。

【永松座長】 今日はちょっと資料がなかったんですけど、以前の資料で具体的にいろいろ例示してありました。ちょっとここでは抽象的な文言だけなのでイメージが難しいと思いますが、もやい音楽祭まちゼミとかですね。ちょっと説明をお願いします。

【岩橋室長】 今、石原委員からご意見いただきましたマッチングポイントの例なんですけど、前回の資料につけていたので、今回省いた経緯があります。前回、マッチングポイントは大きく六つに分けてしまして、例えば遊び場として既存のものを生かすという意味

で、広場、公園、子どもセンター、保育園、幼稚園を例示しておりました。また、二つ目の触れ合いの場といたしまして、デイサービス、それから地域リビング、本読み場、茶飲み場、もやい館、ふれあいセンター、それから理容室や美容室、公民館といったところを使っていこうということで、なるべく今あるものを生かしながらというコンセプトで考えていますので、それはそれとしつつも、やはり先立つものがないとねというご意見もあったものですから、今回、予算などの話がちょっと出てきたりしています。

【永松座長】 予算の話は非常に難しく、私が座長をやっているまちづくりの関係だと、それが呼び水になって自立的に活動するケースと、もらった補助金分だけでとまるケースとに分かれて、どちらかというと後者が多いんですね。だから、自分たちが時間とか少しぐらいのお金を出しても、これはやる価値があるからやろうよねというところでスタートしたグループのほうが、結果とすると長続きするというんですかね。その活動が知られてくると、今度は行政のほうが少しお金を出すよとか、そしたら自分たちで一応運営できるんだけど、スケールとかレベルを上げて少し大きくしてやるという、そっちのほうに行くので、最初から補助金を用意すると補助金目当てになりやすいので、非常に難しいことは難しいんですね。

それともう一つ、実際に今、市役所等がやっているいろんな試みをブラッシュアップするというのもあると思うんですね。藤本委員が言われたように、既にやっているものをペアリングするというアイデアがあってもいいのかなという感じはします。

【石原委員】 補足してよろしいでしょうか。例えば、予算の件で言いますと、前言ったかもしれないんですが、水俣の人が言っていておもしろい言葉だなと思ったことがあって、よく住民参加を呼びかけましようということを行政が言いますが、行政参加だと言われたんです。住民が既に走っているプロジェクトに行政がそこに乗っていく、そのほうが回るんだよというのは、すごくおもしろいコンセプトだなと思ったんですね。

実は、まさに所長がくださったこのお菓子、おそらくモンブランフジヤさんが開発しているお菓子なんですけれども、ここはスイーツのまちづくりの一つの拠点になったところで、今言った健康志向のお弁当屋さんというのはこの人たちが始めているんですね。その仕組みがとてもおもしろいんです。

どういう仕組みかといいますと、あえてゼロ予算で始めるんだけれども、やっぱり先立つものは必要だと。でも、行政からもらっているとどうせ続かないとわかっている。何をやったかといいますと、商店街の商店街町内会費というのがありますね。従前はあれをお

祭りとか飲み会に使っていただけなんですけれども、それをお祭りや飲み会に使うのをやめて、50万円とか100万円を集めて、町内会としてのスタートアップ支援費にしたんです。そのかわり、みんなからお金をもらっているんだから、ということで、スタートアップ支援を受けた人も一生懸命やりますし、それで商店街が盛り上がるとうれしい、という仕組みなのです。例えばそういうおもしろい仕組みに取り組んでいるところに対して、アワード、つまり顕彰をしていくと。例えば、私たち、3世代健やかタウンを進めたいですと。それに足して、やりたいところに予算を上げるより、それに該当するような仕組みややり方を表彰するみたいなコンセプトもおもしろいのかなということ、向こうが嫌がるかもしれないですが、ちょっと思いました。済みません、つけ足しです。

【藤本委員】 私もふと思いついたのですが、愛知県で「高校生ランチ革命」というプロジェクトをやっているNPOがあります。結局、ビジネスモデルをどう組み立てるか、どこから資源を得るかというのがポイントで、資源とは、お金だけではなくて人材だったり物だったりするんですが、その資源の流れをきちんと整理した上でビジネスモデルが成り立つかを確認してスタートさせないといけない。そういう意味で思いついたのが高校生ランチ革命なんです。ある地域の高校生が、昼食は給食がないので、お金を持ってきて売店で買った菓子パンだけを食べていると。それを憂った地域の人たちが、ワンコインで買えるぐらいの高校生が食べるための健康的なお弁当をつくっていくんですけど、この素材を、例えば農家さんで余った、売れないようなものを寄附でいただいたり、それを例えば障がい者の方に手伝っていただいて皮をむいたりして、それをお弁当にして提供する、売れたお金で、そこの運営を回すという仕組みに取り組んでいます。

1対1というよりは、そういう、もう少し地域のいろんな人たちがつながるような形でビジネスモデルが成り立つのではないかなと思いますので、資金も含めて継続していく事例の一つかなと思いました。結局、高校生の昼食が改善され健康になるという、地域で課題に取り組んだ素敵な事例です。

【永松座長】 ほかに何かご意見ございませんか。

【松永委員】 話を大きいところに戻して恐縮なんですけど、資料に「実施にあたり必要なこと」とあって、その上に凡例で「対応策」ってありますよね。この対応策というのを、ここでどこまで具体的に出そうとしているのかというのが、まずよくわからない。すごく具体的なもの、それに沿ってやればある程度のことのできるみたいなものを出したいのか、あるいはもう少し抽象的な成功のコツみたいなものを出したいのか、その辺の具体感がよ

くわかりません。そこを教えていただければと思います。仮に私が水俣で、これをやってください、協力してくださいと言われて、自分に何もノウハウがなければ、この資料に書かれている対策みても多分やれないんですよね。だから、どこまで、ノウハウ的なものを入れ込むのか、大まかな項目だけでいいのか、そのレベル感とか具体感みたいなものをまぜ決めたいというのが一つです。

それから、世代間交流に関する施策が抜けている気がします。それぞれ「参加者がその気になる」とか、「子どもが参加したくなる」とか、あるいは具体的なところでは、「おじいさんが子どもに」というのは入っていますが、高齢者と子どもが集まったら交流が生まれるかという、多分そんなことはないんですよね。そこには世代間交流を促すための仕掛けだとか仕組みだとかがないと、単におじいちゃんが子どもに説教しておしまいみたいなことも起こり得ます。三世代交流をしっかり核にしたいのであれば、その対策を出すべきじゃないかという気がします。

【永松座長】 ありがとうございました。

どの程度具体的にここに書き込むかという話ですけども、事務局側の考え方をご説明ください。

【岩橋室長】 マニュアル的なものをつくるのは無理だと思いますので、やっぱりコツを例示するレベルだと思います。それは行く行くは研究会の報告書として活字になり、また市への政策提言書としても活字になるんですが、そこでもやっぱりコツのレベルなんだろうと思います。

二つ目の世代間交流の具体的な施策なんですけど、今この1ページの中では、改めて見ますと、一番下のほうに交流メニューの準備ということで、モデルプログラムの作成、あとは上から二つ目のポツでリーダー、担い手の確保ということで、OBの教員を使ったりとか、そういったところの話が、今ちょっとだけ入っているのかなというところなんです。施策として、もっともっと必要だということであれば、そこを加えていくと、それが研究会報告書の中でもだんだんと膨らんでいく部分かと思います。

【松永委員】 私が知っている例ですが、元教員が子ども向けのボランティアを希望されて、でも実際にはうまくいかなかったということがあります。子どものことをよく知っている元先生でも、教員の立場を離れてボランティアだとうまくいかないこともあります。交流の場には、やはり新しいコミュニケーションのあり方やツールだとかが必要で、OB教員を入れればうまくいくことではないように思います。

【藤本委員】 ちょっと追加で。私もOB教員だけということではないと思っています、以前も発言したと思うのですが、それらをアテンドする人というのが必要です。先ほどちょっと発言させていただいた、例えば今立ち上がっている若者の動きを横連携させるには、これをアテンドする人がやっぱり必要というか、アテンドしたり、つなぎ役になったり、両方のことがよくわかる、全体をきちんとプロデュースできるような人が必要で、その中の一つの支援者として学校の先生という立ち位置なのかと思います。

【永松座長】 確かに、マッチングしたり……。熊本地震のときもボランティアの人がばあっと来ました。何回もボランティアをしている人は大体ご存じですけど、初めて来た人とかは何も持ってこない——と言ったらおかしいんですけど、行けば寝るところとか全部用意してくれるだろうみたいな人も一緒にまざって来ます。そういうときに、まず集めて、教育するというんですか、できないことはできないとはっきり言ったりしてさばかないといけない。最初のころは、そのスキルを持った人が熊本市役所とか益城にいなかったんですよね。急遽、東日本等でそういう経験をした人に来てもらって、その人がさばき始めて、やっとスムーズに行くようになりました。やっぱりその種のスキルの人がいないと、なかなかうまくいかないというか。やっぱり同じボランティアでやりたいという人も千差万別といいますか、非常に指示に従う人もいれば、自分はこれしかやらないとか、そういう人たちがまざるので、そこら辺はぴしっと言う人がいないと、ばらばら状態になるというのがたしかありました。

そのほかにございますでしょうか。

【植木委員】 ここに実施にあたり必要なことが9項目あるんですけども、この順番というか。全部、総花的には、いいんでしょうけれども、例えば、長期的なとか、短期的なとか、中期的なとかもあるでしょうけど、あえてそういうことを入れなくて、順番をもう少し精査してもいいのではないかなという気がします。例えば、高校生、大学生の活躍の場をつくるというのが、今のドラフトでは一番最後になっていますけれども、1ページのところにいかに続けるかということで、高校や中学校の授業やプロジェクトの一環として行うというように関連性があるワードが出てくるじゃないですか。なるべく、読む側から見ると、そのところが浸透しやすいようにしてもいいのではないかなということが一つあります。

もう一つは作文の仕方というのか。要するに、今、点のあるところが見出しだとするならば、スタートアップ支援を云々とか、関連づけて確保とか支援とかありますけど、そこ

のところをもう少し、言葉にエッジが立つようにしたほうがいいのかなと思います。行いたいんだったら「行う！」とか、そういうふう（スローガンの）に持ってくるということもあるかもしれません。

以上2点です。

【永松座長】 ありがとうございます。

牧迫委員、何かございますでしょうか。

【牧迫委員】 ありがとうございます。いろいろと意見を拝聴しまして、実現は結構難しいなと思っていましたですね。個人的な意見ですけども、私自身、今、既存のいろんな資源があると思いますし、これに一味加えていただくと、ここを出てきている目指すものに近い活動をやっているところがあると思いますので、そういうところに参加いただくのが一番いいと思うんですけども、逆にそういう方々は、結構自分たちの思いとか、強い意思で始めておりますので、そういうところに属してくれるかという、マッチングポイントになっていただくメリットがないと、なかなか入っていただけないのかなと。そうになると、さっきおっしゃったような、ここはここでやってという繰り返しになるのかなと感じています。それはほかでやってもそう思うんですけども、そういう意味でいうと、マッチングポイントのところ、登録になるのかわからないですけども、そうやっていただくことによる、企画してくださる、活動してくださる方側の何かしらのメリットといいますか、やる価値がないといけなくて、善意だけでいけるのかなとちょっと感じる場所です。じゃあ、それを横がつながるような体制をとってくると、誰が旗を振るのかとか、行政にお願いしてうまくいくのかとか、いろいろ考え出すと、さあ、どこからやったらいいのか、今、私は非常に混乱しているところです。

【永松座長】 やっぱり、通常この種のことをするとき、政策提言として、最後に具体的な一つのモデル事業例みたいなものを示しますよね。要するに、こういうものを考えて、水俣で実現可能性がある事業、取り組みには、例えば、こんなものが考えられますねというのを幾つか終わりにつけて閉めるというのがよくやる方法なんですけど、牧迫委員が言われたように、非常に視野が広くて抽象的なので、焦点がなかなか絞りづらい、イメージしづらいところが、このレベルではまだあると思うんですよね。どこまで事務局のほうで考えておられるのかわかりませんが、全く実現するかどうかわからないものを提言してもしょうがないんですけども、これまであるものを、藤本委員が言われたようにプラスアルファするとか、これとこれをくっつけると相乗効果が生まれるとか、ある程

度、実現可能性があるような実例を、水俣の例を、既にやっているものを含めて後で書き込んでいくと、現実的な具体的イメージが見えやすい感じはします。例えば、子どもから大人まで参画させると言うんですけど、どういうふうにするのかがないとわからないので、登録制にするなり、あるいは既にマイスターを取っていたり、漁業の人でも何とかとあってあるじゃないですか。そういう人たちがこれだけいるのでとか、そういうリスト化を図って、交流を図りますとか、そういう、もう少し具体的なことが話の中に要るのかなという感じはしています。

【勢一委員】 次の資料ですが、研究会報告書の骨子案を見たときに、資料7の2ページのところで、今議論している資料6の部分が、VIのところにはまる内容だと思います。これをVのところと見比べたときに、もしかしたら内容が相当重複するのではないかという感じを持ってまして、結局、今議論している内容というのは、マッチングポイントの仕組みをどう動かしていくか、そのためにどういう対応策があるかという議論ですけど、その上のVのところで書くことと相当重複するのかなと。項目だけ見るとです。事務局の意図はわからないのですが。そうなってくると、VIの課題と対応策というくくりで何を語ればいいのかという、今お話に出ているいろいろな部分はVのほうに盛り込むことができ、入っていないもので言えば、スタートアップ支援とか、交流メニューの準備とか、があるので、もし追加でいろいろ情報提供するのであれば、そういうところがポイントなのかなと感じました。

マッチングポイントを使った交流でおそらく期待したいのは、いろんな形の交流の場ができる、それぞれ自分に合うところで楽しんでもらいながら健康になりましょうということなので、そうすると、こういうのをやったらいいですよとマニュアルにしまうと、同じようなものばかりになってしまうので、それよりは参考事例集みたいなものをつくって、こういう取り組みがありますよと紹介する形にとどめる。これは水俣の例でなくてもいいし、水俣のマッチングポイントとはちょっと違う取り組みでもいいですけども、こういう交流が図れる取り組みがありますよという事例を具体的に紹介するようなものをつける。あるいは、交流のメニューとして、こういうことをやって成功した場所がありますよというのを具体例としてつける。その中を見てもらって、それぞれのマッチングポイントをやりたいなという人たちが、これ使えるねとか、これはヒントになるねと思ってもらえるような仕組みのほうで、むしろ使い勝手がいいのではないかなと思っています。

実は、内閣府でかかわっている地方分権の仕組みで、地方分権は制度等を変えて地域に

権限をおろすわけですけれども、そのときに権限がおりたところで、その権限を使っていけば地域のためになりますかと言っても、急に権限が来ただけでは、現場はどう使うかなかなかびんと来ないのですね。そこで、過去に別の自治体がこの権限を使ってこんなことをやってうまくいきましたよという事例を結構頑張って内閣府が集めて、事例集をつくった。それを配ったら結構好評で、ああ、こんなことできるのだったらうちもやってみようという動きが出てきて、それを今フェイスブックやツイッターを使って発信をして、情報共有してもらっているところです。どれが使えるかというのは、全部の自治体共通ではないけれども、こう使ったらいいよねというのを見つけられるヒントがあれば、それはそれで価値があると思います。

【永松座長】 ありがとうございます。

ではちょっと、事務局から残りの資料7の説明をしていただいて、その中で、今も含めて研究会の報告書の全体像を見ながら意見を頂戴したいと思います。

じゃあ、説明をお願いします。

【岩橋室長】 それでは、資料7をごらんください。

これは、来年3月にこの研究会でまとめていただきます研究会報告書の骨子の事務局案です。今、目次のレベルでおおむね作成をしております。本日は、まずローマ数字で書いております大見出しを決めていただきたいと思いますと考えております。その後、その下の階層について議論していただければと思います。

まず、全体の構成について、大まかな流れを説明します。全体の構成は、これまで研究会で議論していただいた経緯に沿って、概ねまとめております。一番最初に「はじめに」ということで、本研究会の目的、検討の経緯、そして、今、みなまた地域の地域創生を議論することの意義、この3点を座長名で簡潔に述べたいと思っております。

次に、Iからが本文になります。最初に、I、みなまた地域の創生に向けて「健康」に焦点を当てることの意義、これを冒頭で明確にしておきたいと思っております。

次に、II、みなまた地域の情勢といたしまして、社会が縮小して、人々のライフスタイルが多様化していく中で、みなまた地域の課題や、この地域に求められていること、さらにフューチャーセッションで引き出した市民のアイデア、こういったものについて述べておきたいと思っております。

そして、III、検討の視点とめざす方向性といたしまして、広い意味での健康の中で、「3世代を育む健康なまちを育む」という方向性を目指すことを述べたいと考えております。

その上に2ページのほうへ行きまして、IV、みなまた地域でめざす地域社会像の構築といたしまして、本日も確認いただきました、めざす地域社会像のコンセプト、ビジョン、用語の定義について述べたいと思っております。

そして、V、3世代育み健やかタウンを推進するための方策といたしまして、先ほどまで議論していただきました、マッチングポイントにおける交流の目標や、リーダー、担い手などについて述べたいと思っております。

次はVI、目標を達成するための課題及び対応策といたしまして、Vよりももうちょっと下のレベルというか、細かい話をVIで述べたいなと思って、今つくっております。VとVIは、勢一委員がおっしゃるとおり、かなりラップしているところがあると思います。

そして、続いてVIIは、国内外への情報発信といたしまして、新たなイメージ像の構築と、国内への情報発信、海外への情報発信というふうに大きく切り分けております。ここは、もともと「水俣病の水俣」というイメージを、もうちょっと変えたいというのが起点にありましたので、新たなイメージ像をここでは記しておきたいと思っております。

そして、本文の最後、VIIIに留意すべき事項というものを簡潔に書いておく必要があるのかなと思っております。

その後、資料を添付いたしまして、あとがきを加えて、閉じたいと考えております。

骨子案については以上です。

【永松座長】 ありがとうございました。

このIからIVまでは既に一応ご了解いただいております、今日議論いただいているのはV、VIですね。これに関して、VとVIが少しダブっているというか、一つにしてもいいのではないかという意見もあるでしょうし、先ほど意見が出ましたように、これをやっではどうですかという決め打ち的な政策提案、事業提案をするのではなくて、人口とか地方という条件が水俣と似たような全国の地域でいろんな取り組みがやられていて、これは水俣でもできるのではないかとか、やってみたらどうかという事例集、それを後のほうにつけるということでした。確かにそれは非常に使えるんですね。まずは模倣からと言いますけど、そういうのを見ていると、うちではここはできないけど、これはこうすればできるとかアイデアが湧いてきますので、その情報も地元にとっては価値があるということだと思います。

これに関して、特にV、VIに関して、ご意見をいただきたいと思っております。

【松永委員】 VIの「目標達成するための」というタイトルについてです。目標をどう

するかというのがさっき少し出たので、もしかしたら変更になるかもしれませんが、もしここに目標を達成するための課題を出すのであれば、その前のどこかで目標というのをきちんと項目立てする必要があるように思います。

【永松座長】　そうですね。だから、ちょっと事務局で検討してもらいたいと思いますけれども、目標とすると、どうしても達成したかどうかをどうやってはかるのかという議論が出ますので、石原委員が言われたように、マッチングポイントが有効な機能を発揮するための課題とか、そういう形のほうがずっと流れる感じがします。言葉をどういう言葉にするかは、ちょっと事務局のほうでまた。目標というのは誤解を与える可能性があるもので、ちょっと考える必要があるのかなということは思います。

そのほかにございませんか。

【牧迫委員】　現状において、水俣市でこういう活動が増えたらいいなという事例というのは、あるんでしょうか。あれば、別にほかの地区だけじゃなくて、こういう取り組みがありますというのも、今後のあり方のモデルとして含まれてもいいのかなと感じました。

【永松座長】　藤本委員が言われたように、ほかで何をやっているか知らないというのであれば、実は水俣で、規模は小さいけれども、こういうすごくいい取り組みをやっているところがありますよという紹介を載せるということですよ。

そのほかにはございませんでしょうか。

【石原委員】　章立てのことと申しますより、もしかしたら内容に入ってしまうかもしれませんが、Vの方策のところなんですけれども、今、方策はマッチングポイントのことだけに絞って書いてあるんですが、マッチングポイントのことだけでいくのか。方策であれば、マッチングポイント以外にもあってもしかるべきだと思うんですけれども、それはいかがでしょうか。

【永松座長】　事務局のほうはいかがですか。Vはマッチングポイントをキーワードにして、そこに絞って提言するというふうに理解しているけど。

【岩橋室長】　今はそういうつくりにしておりますけど、先ほども、VとVIを一緒にというご意見もありましたので、そこは今から議論の中で決めていくのかなと思っています。

【永松座長】　でも、マッチングポイントが機能するための方策をVIに書いてあるんですよね。

【岩橋室長】　そうですね。

【永松座長】　だから、多分これはマッチングポイントを中心にして提言するという理

解でいいと思います。

これまで出た意見では、Vの1のところにマッチングポイントの参考例ってあるんですけど、ここでいいかどうかですよね。VIが、Vの2から4にちょっと重なるところがあるので、どう整理するかですね。例えば、マッチングポイントを推進するための環境、これはマッチングポイントがうまく機能するためのもので、下と同じなので、Vの2、3、4とVIの箱の整理が必要だと思います。例えば、Vの4の市や公的機関の役割と、VIの3の市や公的機関に期待することというのは、基本的には同じになると思いますので、そこをどういうくりで節として分けるかを、ちょっと検討いただければと思います。

【望月所長】 VとVIは重なっていて、同じことをもう一回書くような形になりかねないので、そこはまた検討したいと思います。

【永松座長】 このほかに、藤本委員かどなたかが言われた事例ですよ、使えそうな事例というのを、一つ節をとって紹介する形にしたほうがいいと思います。委員の皆さんの話を聞いていても、役に立ちそうな、水俣でもできそうなアイデアというのがたくさん出てきましたので、少しそれを調べて、地元の人たちでもちょっと手を伸ばせば届くとか、あるいは活動的なグループであればできそうとか、いろいろなバリエーションを例示する項目を一つ設けてあると。地域おこしというか、地域創生関係はほとんど事例集だけです。考え方が1枚紙ぐらいに書いてあって、残りは、既にどこではこんな取り組みをやっていますよというのがば一っと例示してあります。ここら辺で抽象的な部分をどうすればいいのというのに答えてくれるのが先行事例だと思いますので、その節も一つ要るのかなとは思っています。

ほかに何かご意見ございますか。

【石原委員】 VとVIの関係におきまして、こういうことかなと思ったんです。たぶん、他の委員と近いことを申しているような気がしますが、VIの位置づけについて、おそらく岩橋委員の意図はこうだったかなと思ったのですが、Vが一般論で、VIがVに関する現状分析と今後残された課題という意図かと思ったんですが、そういう理解に近いでしょうか、遠いでしょうか。章立てで言うとVとVIの関係性ですね。一緒にしようかという話がもちろん出ているわけですが、もともと分かれていた意図が何だったかを酌み取ればということなんですけれども。

【岩橋室長】 もともとは、資料2でマッチングポイントを設けるということと、目標を設定するという、そのための課題、対応策というふうに分けておりましたので、単

に章も分けてつくったということです。

【望月所長】 基本的には、Vはマッチングポイントとはという内容を打ち出すというイメージで、それを実現化するためには、こんな問題がありますねというのがVIでというイメージです。マッチングポイントがどういうものかをそれなりに説明しないと、なかなかわかりにくいところもあるので、章立てとして最初に設けたものです。

【石原委員】 わかりました。ありがとうございます。

【望月所長】 ただ、一緒にできそうな感じもしますし、そこはまた検討します。

あと、事例の関係はおっしゃるとおりで、一つ章を設けて事例集的に置いておくのは非常に大切なことだと思っております。水俣で活用できそうな事例みたいなものがありましたら、ぜひこんなのがあ、これは発展させられる可能性があるというものをご紹介いただけたらと思います。全国の事例は今までいろいろとご意見をいただいておりますので、組み合わせたら、一つの結構大き目の事例集ができるかと思っております。

【永松座長】 先ほど藤本委員が言われたように既にあるイベント、運動会もそうですし、まちの行事もそうなんですけど、それを生かしてこういうことをやっているという事例、全く新しい事例だけではなくて、既にどこにでもある行事を活用してうまく取り組みをやっているという事例を入れると価値があると思います。

ほかにございませんでしょうか。

【望月所長】 あと、石原委員からもいろいろと指摘がありまして、最初のほうの健康に焦点を当てることの意義というところで、健康の情報というか、データのなものについては別途、事務局のほうで整理して、なぜ健康に主眼を置くかについてデータのサポートできる形にしたいと思っております。これは少しお時間をいただけたらと思います。

【永松座長】 それじゃあ、VとVIの整理ですね。先ほど説明がありましたように、Vをマッチングポイントとはこういう機能を備えたものですよと言って、その次にVIを、それがうまく機能するための課題というんですか、そういう分け方にするのか、一つの章に入れて連続するのかなというのは、事務局のほうで検討いただくことにしたいと思います。

そのほか、皆さんからご意見とかご質問はありませんでしょうか。

【望月所長】 いろいろ章立てを考えていますけれども、こういう情報を盛り込むべきとか、事例集的にすべきであるとか、今もいろいろといただきましたが、他にご意見がありましたならば、ぜひ、なるべくたくさんいただけたらと思っております。

【永松座長】 そうですね。大小取りまぜてといいますか、例えば、先ほどの地域創生

なんかでも、とても熊本ではできない例もたくさん入っていて、それは、全国に見てもらうためなのでよりどりみどりの形になるわけです。水俣というのは地方の中小都市ですので、ほかの地方都市、あるいは町や村でやっているようなことでもいいと思うんですけど、そういうものをもし目にとめたり思いつかれたりしたら、事務局のほうまで、ここでこういうことをやっているという情報だけでも、後でネットで調べれば出てきますので、ご連絡いただきたいと思います。

それでは、そろそろ時間が迫ってきましたので、今日は途中ですけれども、ここまでにさせていただきたいと思います。

【岩橋室長】 それでは、次回、第7回研究会は、11月3日、文化の日にここで行いたいと考えております。議題につきましては、今日多くのご意見をいただきました、マッチングポイントでの交流の目標案、それから目標達成のための課題、対応策、それから、研究会報告書の骨子案ということで、今日積み残した分を次回またやっていただきたいと思っています。

その次の第8回の研究会は、12月11日、日曜日の夕方から、ここで行いたいと考えております。時間はまだはっきりとさせていませんが、12月ということもありますので、できましたら、その後、忘年会でもできたらなと思っているところです。

それでは、以上をもちまして本日の会合を閉会いたします。本日はご多忙のところお集まりいただきまして、ありがとうございました。

— 了 —